972

東洲斎写迦八相

筑紫三夏 編

傳文庫

眞書釋迦八相傳文庫初編下之卷
重訂
東都　万亭　應賀原著
花笠　文京　重訂

第貳回　瞋恚の炎

去れど痛わしや摩耶夫人ハ何心なく青龍城へ歸らせたまへバ二人の行者ハ一室を立ち出で今見届けゝる容姿の如くゝ摩耶の形容を作ふんと秣の米を取ゞ寄せつゝ月の水を迎へ取ゞて七回洗ひく粉ゝ碎き是ゝて婦人の顔を造ゞ秣の藁ゝて支躰を拵へらへ五形の串ゝて此首彼首を繼ぎ合せ五色の絹を纏ハせ腰ゝハ花の帶を締め三ッ羽の征矢を挿せて丈けのうもゝを懸け頭ゝ丈でを切り付けて地の下七尺の底ゝ埋めつゝ上ゝハ調伏の壇と飾ゞて四方ゝ七五三の繩を張ゞ供物ゝハ秣の飯を黑く染め百八十本の釘をさゝ四隅ゝ幣帛を立て華蔓ゝ木瓜の花沙水ゝ白蛇の水をたゞ宮守の油をもつて燈明を照し虎狼の骨ともつて燒香ゝ焚き桂木ゝ三尺の片刀の劍をたて芳木

ゐゝ紫陀羅樹檀の備へ黄絹の袖を逆さまゐ縫ひつけ麻を取て寄せ裏かゝぬ草履と幷べ行者ゝ左て縄よて華蔓を結び襷よのけて調伏の壇よ立向ひさる形狀ゝ身骨も慄立つゞのりあり去る程よ儀伯仙人用意の幣帛おつ取て天神地神あらゆる惡鬼神を二個の念力よまかせて祈て立て〳〵責処掛れゞ殿中俄りゐ震動ー不思議や百八十本の幣帛一所ゐ亂れゝゝれゞ無間仙人大音あげ「如何よや如何よ摩耶夫人無明長夜の狹このらん出よ〳〵と呼ゝれゞ又も鳴動さかんよして地の下へ埋めし摩耶の形代顯ゝれ出で備へさる絹を打ち掛てうらかゝぬ草履を踏み壇の上へあゞりつゝ傍への御簾のうちへ對て「アラ情おや姉上自らゞの王子を懷胎せーも不義淫奔の心かふ貴下と辱ーむる邪曲おらねゞ偏ゐ宥ーてたまゝれノウ恐ろーやアラ苦ーや請願許ーて〳〵と熱鐵地獄の苦楚を受くるも弱ゝき姫御前の身を打ち臥ーて泪限ゐ泣き詫びたまふ其の傍らゐゝ二個の行者猶も責め掛け祈て立つれゞ摩耶の形代ゝよ〳〵煩悶へ右ゐ倒れ左ゐ躍躍ひ七顛八倒の愛目ゝ眼も當てられぬ折こそあれ最前より一室の裡に始終と窺がふ姉の輪疊彌花の容姿も山風よ塞

きー如く顔ゞせ怒ふー懷劍たづさへ御簾のき揚て靜々と出で立ち對ひ言葉を荒らげ「アラ心地よや摩耶夫人よくも淨飯王の御心ゐ諂諛ひ自己をゞある甲斐あーゐ和女一個を手活の花と夜のお伽の樂みゐ自己ゝ唯獨て寢の淋しさ閨よ物思ゝそる應報ゝ顧面それ苦しくゞ父善覺王を恨むべし今ゝ親と親とも思ゝぬ妾まーて和女を妹おどゝゝ思ひ寄らず緣ゝ切つたり觀念せよと裝裾を蹴立てゝ馬ゐおゞら行者よ對ひ「ソレ此の形代をよきゐ計らひくれよのーと仰せの下よ彼の二個ゝ壇より摩耶の形代を引き下し幣帛を挿ー楚ろに押包みて取て乘てんと殿中を退きゆく扨輪疊彌ゝ調伏の法成就せーと悅こぶところへ馬將軍ひそやうよ進み出で如何ゐ姫君斯の如く調伏も調のへゞ摩耶も是ゥらおき身とおれゞ今までの御無念も晴れ是非とも帝王のお伽ゝ貴下ふ獨て嘸お悅こびと云ゝきて流石よ輪疊彌嬉れーき素振もあらいしのぬ此の上王子を懷胎ゝたせゞ足下も格別とり立ん大儀々々唯何事も潛やうよ隱むやうゐ付々の女へも言含処よとあり々れゞ馬將軍ぬからぬ顔よて「夫れゝ毛頭ーも御氣遣ひ遊ゞそお下臣ゞの宜しく計らふべー扨て二個

の行者へい當坐の褒美ゑ箇樣々々と述べて手づゝら寶藏より沙金千兩取り出し蝶花形ゑ押し包み是れを白木の臺へ上せ他わ又綾錦千匹づゝ腰元女中ゞ荷ひ出で廣間の内へ飾り置き待間程なく二個の行者形代を遥か隔ちし山へ打ち棄て勇み立て回ゞれゞ馬將軍厚く管待し當坐の布施として即ち是なる

品々を下さる重ねて又も沙汰せんとさゝ出されて行者們「思ひ寄らざる結搆の品々有難く頂戴つかまつると首を下げて一禮述

㊀ べ品々携さへ立んとそゞも餘り重くて腰立ず漸やくよゞ

個ーて欄干の下へ運び下りたり去れバ又橋曇彌ハ何とおく心嬉ーく夥多の女中へも常ゐ變ずて物柔らかに言葉をゆけ手道具の類と夫々ゑ遣ハ一惡事を深く慰ませ々れど衆皆も此方の姫君を帝王の御意ゑ適ハせんと日頃の願望も達さー嬉ーさ此の上ハ少しも早く王子の御種を宿たまへと取囃そさーも物密りゑさゝめく處へ一個の腰元狼狽て來ずて「喃恐ろーや只今の行者二個とも欄干の下ゑて五体ごのそくみ歩行くこと叶ハず手足を蠕搔きて苦し氣ゑ見受まそると申し上れバ橋曇彌ハ何故と立ち出でたまへバ衆皆も隨ごひ行き是の体を見て驚ろく中ゑ橋曇彌「アレ〳〵將軍二個とも祈禱ゑ精盡き草臥れ々ん手を把て介抱せよと仰せを被ひり馬將軍取り敢へず下へをり立ち二個の手を取り助けんとする折から俄然りゑ惡風颶風の如くゐ吹起ずて鳴動それバ道ハ如所ゐ忽地大地メリ〳〵と稻妻の如く四方へ裂て行者二個ハ眞逆さま金輪際へぞ落ち入ずて々る此の有様を姫君と下先次々の女中見るよりも身を震ハせ偖みそ摩耶を祈ずー應報と怖れ戰慄き一同ゐ奥の方へぞ逃入ずける去れバ神ゐふぬ身とて佛をも產みたまふ殊ゑ尊とき摩耶夫人されども知れぬハおん身の程ゑて悼ハしくも青龍城へ回らせたまひし其の日より祈らるゝとハ毫知らず姉君の心操と最と頼母しく思し召ー又た一ッゑハ懷胎の王子と易々產み落し何うして斯ーての嬉ーさも指をり數へ早晩とや紅葉色めく菊月の始めつゐたとゐりゆれバ帝王を初め下々まで程おく御安產あるべーと僉々悅こび待々るゑ或る時夫人轉寢の夢見ゑずて病着起り俄然かゑさー込强くーておん苦ーみとゐりゆれバ優陀夷夫婦次々の者ハ這ハ何故と氣を痛めソレ醫者ゑ藥劑ゑと騷動とり〳〵ゐりゆれバ末々までも夫人の病痾平愈を祈ずー介抱愚ゐおかりーかゝ漸やく差込も治まずて少ーゞ落着きたまひーゆゑ次々も氣を休めゆる其の時摩耶夫人ハ優陀夷夫婦をゐん膝近く召ー寄せられ最も苦ーげゐる御聲ゑて「喃優陀夷妾ら〻差込ハ治まれども骨の節々痛み强く全身ごそくむやうゐ覺へ動くこともゐゐハねバ起き上るべきやうもおく夫ゐ又胎内の王子も早七月ともゐりたれバ最と仂おく働らく縡の折々此の身ゐ覺ゆれバ心嬉ーく思ひしゐ今とゐりてハ扳殼のやうゑ覺へて胎内ゑ王子ありとも思ハれず心おゐねバ此由を悉しく

醫師よ繹ねてたもと仰せよ優陀夷い取ま敢ず巧妙のお醫師を招ぎ寄せ御容体を窺いそるお篤と拜脈して申そやう「一体懷胎のおん身よい物の類似氣の騷動と申も絆い往々ある習慣此の度姫君の御煩らひい夫れお異ゐることおゝれい少もお氣遣あるお及ばず御安産も程あるまじ只御保養ごの肝心と密らかよ述々れい實お左もあらんと次々も種々の御慰みを勧め病痾も薄らきたまひしかいや十月ともあり々るよ未だ御産の氣もおけれい次々よりも摩耶夫人の心のうちの物案ド過し頃お謁見えせし供御の女と側近く呼べとの仰せありけるゆゑ其の旨を掛りへ通じ御前へ召し連れ出けれい摩耶い膝元近く召ー寄せおん身の樣子何くれと包まず隱さず語ま玉まふも女同士の心易く供御の女中もおん身を痛と ま携で摩ま おごらの物譚ま「イエもう姫君さまのお案ドも御道理でい御座まそれど決ーてくよ〳〵思し召そる月越ーよ種の籠まましたを即ち累ね月と申して下々よも夫い〳〵ゑかい事御座まそゆゑお心配ひおくお心と浮々とあそいせと諫め申せい何時よおく御機嫌も美もしく浮世の噂さも折ふふの暫しお心慰さめと次々共供離し

々る偖百士の輩僧よりも摩耶の心と慰さめんと僉夫々よ思ひ付たる品々を献上ーゝる斯て十三月よ至れども王子御誕生の樣子もゐゝれい摩耶い頼みの綱も斷れ果てゲつくりと氣を落ー再たび床よ着きたまひ晝夜の分別もおく只泣悲ーむどりよて假令ひ病痾い癒たるとも身の懷胎い思ひも寄らず重き病痾を色々よ評判されー口惜さ君への聞え姉君の手前アラ耻ゥーさ此の身ぞや只だ此のまゝよ死ねよゥー生活て甲斐おさ俺ごの生命と吾と吾身を死ぬ覺悟思ひ定めて夫れとおく召使の者へ夫々の紀念分配を遣いさんと心を當て置き衣服を更ため親御へ一筆委細の綜を書置のいやと手近ある硯引き寄せ忍びやかお墨摺り流と胸の裡堰き來る涙い雨霰筆の穂長き命毛も今い甲斐おく書き竭ー今宵限ま と涙を拂ひ「喃父上母樣先立つ不孝いお宥ーあれ此年までの御高恩海山ゐれど愬じいお果敢ゐき綜を評判されて國への聞え親御の面目生耻晒そも面伏せ請願妾ごの亡き跡で必らず悲嘆いて玉いるお冥途の故障とゐりもやせん只縱現世のお多殘お片時ゐりとお側お居て延永の御恩の十分一でも養おひ返ーたう思へども思ひ掛おい身の發跡

よ一日片時御用も聽ず今般の際よ御顔も見ず果て行く身の心の中いかゞ何樣であつたろと思ふてゞ一下さるゐ親よ先立つ大膽者不孝者よと憎んで給べ夫ごの只纔の罪亡ぼ一返へそ〳〵もお老年の上且暮おん身と大切お只だ姉上を此の世の便と思一て果敢ゐい妾のことをゞ斷然思ひ切つ亡い跡々でひよんゐこと思ひ出して鬱々と悔んでゞ一下さるゐ云ひ遺一たん數々い須彌の山ほどあるゐれど漉ゐと涙先立ちて物云いせねゞ後や先あふ〳〵申し殘一候と書い書ども眼い眩み讀むとも盡ぬ胸の裡ア、如何ゐる天魔ごの魅んりてう斯る果敢ゐい身の最後思へゞ〳〵過よし春の彌生の夜の夢見より此の樣ゐ病よ取付れて此の身ゞかりう吾ごの君の御心さへよ左や右と痛めーことの勿体ゐや今ごの今生のお名殘と豫て注意ゐむ懐劍をやとら取り出そ覺悟の際胸一ゞんゐ思ひ詰め岸破と伏して泣き沈み暫ー絶え入る心の中哀をと云ふも愚ゐあと去る程よ摩耶夫人い豫ての覺悟も今更よ親と思ひ君を想ひ頻りよ嘆き沈みしごの不測なる哉此の折りゐふ俄然よ眠氣さーて思いずも睡眠むともゐく打ち伏ーいごの夢う現り幻の如くよ光明輝やきて三五の乳房を

搔き分けつゝ過一頃對面せし佛現いれたまひしごの紐地玉を延べたる如く三十二相備かりたる御優姿の稚兒と變ト伏したる摩耶をんたん氣よ搖と起し〳〵おん聲清爽かゐのたまふやう「嘸久しや母君御身苦しみ在まそゆゐ此の身を恨みたまふい理ゐれども如何ゐる天魔の魅りぞと宜まひしてそ恨みゐれ過一彌生の頃衆生の願を普ねく滿ん其の爲めよ正覺そる麿ゐれゞ何ぞか母君の心を破るべき其の疑念を解ん爲よ仔細を包ます物譚らん必らず他へ泄洩一たまふゐ「夫一時の瞋恚よ具定公の善根を燒き棄て又諸々の生を亨るよ人と生れ人と生れて萬づの道理を知ずよく至るを即ち三ッの喜悅と云ふぞ」一又世界よ十定の制定あり先づ身尊とくー て卑しさを捨てぞ○同じく暗さを捨ず○同ドく愚ゐるを捨てぞ○同じく惡人を殘害いず○同ドく貪婪さを捨ず○同ドく衰弱ふ者を捨ず○同ドく協いざるを捨ず○同ドく詐僞を捨ず○同ドく欠損さるを捨ず○因果因緣を知つて外を恨むること勿れ是れ十定の制定ゐり扨又未だゐ此の麿ゞ誕生せざる其の仔細い姉君轎曇彌嫉妬深く御身の懐妊を聞くよりも過一彌生の頃詐いりて月景殿へ迎へ

しゝ親子を調伏せん爲あり其の邪法ゑゝ人間の發跡の門を七重ゐ密閉ぎ父母より分る三百六十餘流の血脈を大綱ゐて縛げ毋君も麿の骨々も碎くるぞかとあれば爭で命の有るべきや去とあがら轎曇彌ゝ已ゑおん身と姉妹の緣を切とたれば今ゝ一も七百生の恨みの念慾やゝゑ晴れ渡とて兩個ぢの命恙がおー只不便おるゝ奈落へ沈淪みー調伏の行者二個あり是も我れ到來歸佛の時期至らば引導して助くべー是等の縡必らずーも忽諸ゑゐ思ひたまひゝ佛力自在の我ぢ身あれば今ゑも生るゝゝ安々れども左あふばおん身ゝ立地ゑ中宮女御と尊敬ゝれて轎曇彌は猶暗きより晴き邪念の一入起とて生々世々ゑ迷ひを取らば麿ぢ功德も甲斐あければ猶尊躰を煩らゝさん今告げまつとし縡どもゝ只此のまゝゑ聞き棄て玉へ端の對面ゝ是ぢ始めて又も逢ふ日のあるべきゑ夢とゐ思ひたまひゝと云ひつゝ再び乳房を分て胎内へ分け入とたまふと思へば忽ち光明輝やきく五躰清らゐ成とし心ば摩耶ゝ驚ろき夢醒めて我と我身を抱きーめアラ勿体あや罪深や疑念晴し今の命斯程尊とき懷胎を天魔の魅りと嘲ちーを宥ーたまへと岸破と伏ー涙ゐがらゐ詫たまふ其の程ゑ早夜ゝ明て最ぢ心の麗ゝしく硯引き寄せ嘆きの中より喜悅の筆を染め有ー次第をこまゝ〳〵と記そうちゑも胎内の王子ゝと仂ゐく微動のせたまひ軈て月日も重ありて二年十月ゑ充つ冬の寒々き空とぞ移とゝる恁て或る時摩耶の御前へ優陀夷進み出て平伏し「只今申し上まそるゝ即ち君の御言葉懇ろゑ聞し召そべー抑々姫君の御懷胎ゝ最早三年ゐ近くあれど今以て其の効驗おし素より典藥どもゝ病氣ありと見立て朕も夫と存ぜるゑ摩耶一人懷胎と申ぞゲ女ゑよりて懷胎と申ぞ者あり夫ゐふぞゝ人の恨ゑて物あやかりもと案ぜれど情け深き摩耶あれば次々の女子どもゝ嫉むべき事躍ゐどもゐー況ーてや姉の轎曇彌も日外の文章の趣ひき殊ゐ親ーき風情ゑて憎む樣子ゝ更々おー是等の縡を落もおく堅く摩耶ゑ云ひ聞せ安堵させよとのおん使只々典醫の計らひゑ任せたまへと述べゝれば摩耶夫人聞ーー召ー「有難き我ぢ君の仰せ去とおがら妾を病氣ゑ見立てとべる典醫の藥を用ひんことゝ中々ゑ思ひも寄らず實ゐ妾ぢ躰内ゝ王子おる事疑ゲひおー夫ゐ付和主ゐぞのとゝ物語る仔細あとゝ必らず他へ洩ーあせそと身の有樣を細やゝゐ云

ひ聞それゞ優陀夷ゝ感ト實よ夫よてゝ御誕生のあさゝ道理此の上ゝ帝王へ愚臣よさ樣よ申ー上げ候ゝん御心安く思ー召せとて其の儘御前を退ぞさゝる斯て三年の春を迎へ二月の初とあり々れゞ帝王國中の相見を百人撰みて呼び出せとの勅命あり依て此首彼首へ觸れられて百人の相見を殿中へ召ー出ー帝王も御簾の陰よりーて樣子如何と伺がひたまへゞ頓て高明大臣百人の相見よ向ひ姫君のおん身の上おん煩ひの但ー又御懐妊なるこの詳らかよ申ー上よと命ぜれゞ相見ども承たまゝ皆肺肝を摧きつゝ堅つ横めつ摩耶夫人の御顔色を拜ー一同よ御懐妊ゝ思ひもよらぜ御煩ひよ極まつたり然も恨みの邪氣ありと正ーく九十九人まで言葉を揃へて申ー々るゆゑ姫君もトめ次々の女中も力を落さぬゝおく涙さーぐむでかりあり時よ遙々の末坐よ扣へー一人の相見の老翁ゝ何とかーけん物をゞ云で只潸々と泣き居るを帝王密かよ御覽じて斯く九十九人の者ごの摩耶を病氣と見立ーよ彼ある老翁のみ仔細を云とで只泣き居るこそ不審あれ事のやうを承たまれと仰せよ依りて高明大臣卽ち件の老翁を呼び近づけて仔細を問ゞ翁ゝ涙を打拂ひ「开も姫君の御容体ゝ只今九十九人ごの見立て申ー上げさる上らふゝ老衰れさる某甲儀ゝ何事も宥免ーたまれと詫るを大臣聞き入れず「イヤ〳〵是ゝ勿体あくも帝王の仰せ忽諸あらぜ看相卜筮何れありとも心の丈を包み隱さで具さよ申ー上ぐべーとのつぴきさせぬ高明ごの言葉よ老翁頭ど擧げ「然らゞ御免を蒙むりて某甲ゞ今相そるところ且卜筮の趣と明らさまよ申ー上ん恐れあがら摩耶夫人ゝこれ信實の御病氣あらぜ如何よも愛たき御懐胎よて然も玉を延たる如き太子御誕生よ極まつたりと具さふ述るを聞敢す大臣威丈高よあり「イヤ翁の言葉疑ごのゝし左やぞ愛たき御吉瑞ぞかも玉を延たる如き太子御懐胎と見立あがら何ぞて潸々と泣き々るぞ不吉の動止心得難ーサア此の儀ゝ如何よ如何ふぞやと責付られて翁ゝ騒かず「其の譯慇ろよ申そべー然れゞ某甲ゞ卜筮ゝ天眼通の仙法よて九曜七曜廿八宿三十六禁の星をたて其の外秘密の法を以て男女の位を指そありと云ゝせも果ぜ大臣ゝ「それゞ又何故よ悲ーくて泣きつるぞ「然れゞ候其の仔細ゝ此の王子降誕の後假令水火の中へ入ぜたまふともおん身ふ恙あることあ々れぞ十善天子のお

ん位を望みたまいず妙覺無爲の位備いり衆生濟度の法王如來
よ在ませバ明日の性命も知れぬ此の
弱い斯やど尊とき如來の結緣ゐ逢ふ
こと難き恨めーさゐ思いず涙を滴せ
ーあとと申せバ君を初と
ー高明大臣其
の外の次々ま
でも是れを聞
て知れぬこと
いい思ひあゞ
ら貪一問ゐ喜

㊀
まびつ丶
一人ゞ信
實ゝ九十
九人ゞ申

そゞ信實の先づ是迄と殘らず殿中を退ぞけゞ
る去る程ゐ摩耶夫人い此夏綿
脫のおん祝ひの日より玻璃沙
那城へ移されて青陽の室へ褥
を設け心も涼ーき帷子よ折こゐ
ら藥玉ゝけ香の薫ひとーはあ
まめく風よ摩耶夫人いまだ宵
の間轉寢したまふ其の所へ愛嬌ゐる稚兒髣髴
と又も夫人のおん側へ現いを楓葉の如きおん
手よて善哉々々と三度撫でて「いろよ母君去
何頃又の對面を約せし故再たび顯われ參たり明日
㊀

より七日の御慎ーみ大切
あり一時の瞋恚よ善根を
焚き捨ると云ひしこそ此
の時あれ夫れ父よ五恩母、

よ十恩とて海よも山わも替難き十月の恩を受けて此の世へ生れ又十生とて厚き恩を蒙むと遠の
ふ世父淨飯王わも對面し奉つらん嬉しや母君とて優しくも抱き着きて撫さ口説き戀ひ焦をたま
ふ光景わ俱わ焦るゝ摩耶夫人アヲ嬉しや唯今こそ御誕生まし〳〵たかと抱き上げて緊抱々々優
陀夷夫婦よ早く見せて喜こばせんと飛び立つをうり心敏しく立んとそれば轉寢の夢い甲裴おく
醒て只諸手わて其の身をのみ搔抱きて居たりしうば這い又夢わてあと々るよと思へど最早御誕
生も近うらんと思へば頻りよ心ろ嬉しく優陀夷を初め次々よ密やうよ物譚とおん喜悅限とあさ
折うら中老職の命婦と呼ぶ女中君よりのおん使わ參とたりとて入り來れば摩耶い忙がい〳〵く四
邊を片付け率此方へと呼び入るれば命婦い靜やうわ坐ふ着て「扨吾が君の仰せわい姫君の御煩
らひより二年三年以來い花の宴もこと無きところ此の節い少し宛もおん快しとの事ゆゑ帝王此
方へ行幸ありて藍毘尼苑の花園わて宮中の人々を殘らず召し出して花の宴の御催しい如何ある
べき夫も一ッい貴后さまのお氣晴しの爲あれば只々摩耶の心任せわ爲よとの仰せわ侍るうゝ如

何思し召るゝやと述れば摩耶い完爾やうわ「思ひがけおん今日のお使最早三年も吾君のおん顏
容も拜しまつらずおん懷うしさ折うらわ此の身わ餘る仰せごと冥加ゐや勿体おや殊わ又局々の
上蔭達も打揃ふてとい如何わも嬉しさ御宴よこそ摩耶が喜悅此の上ゐし君への御返事よき樣わ
申し上げ呉よとて猶種々の物譚とつ命婦を管待し歸され々る去る程わ淨飯王い俄うわ花の宴
のおん催やしわと其の準備とて殿上殿下上を下へとうへそが如く內外の官人立騷ぎて局の取込
政鶏の混雜大方おふざり々り斯て其の日とおり々れば帝王玻璃沙那城へ行幸ありて月卿雲客殘
りゐく藍毘尼苑の西青陽殿よ上下の隔てゐくぞ列おり々る扨又姉の橋曼彌も君よりの仰せわ依
りて花の宴わ立ち出る容姿い優しく見ゆれども心のうちの怖ろしさい世わ比喩ふべきうたもお
く妹摩耶とい同胞の緣斷とたれば今更よ心よりゝる事もおく怖ぢ慄せぢ廊下傳ひよ次々の女中
引き連れて御前近くゞ進み々る左れば青陽殿の南の閨へい諸贈を据ゑ北の閨へい夥多の女中を
据ゑ輪曼彌の褥と右の上へ敷き摩耶夫人の褥を左との下と定め僉々衣紋搔ひ繕ろひ坐を列ねた

る美々ーさい
譬へん方もな
き風情あり然
れども摩耶夫
人只一人未だ
出坐あかりし
かバ帝王命婦
と近く召れ「
何故摩耶い立
ち出ぬぞ今日
の花の主なる

よ何ぞて遽きや疾く召せと仰せよ
從がひ馳せ行きて斯と
申せバ摩耶夫人「左れ
バ今日の行幸殊よ珍ら
しき上臈達の迎ひの爲
め道まで忍い赴きーが
君の思ーー召のやぞ如何と身い此よ扣へ侍ア直樣參內致さ
んと夥多の女中を左右よ引連れ出たる其の容姿天人とも
仙女とも譬へん樣あきおん粧ひ加旁之面よ
い仁愛慈悲の相を顯いー靜々と歩行ませたま
ふおん頂上をアラ不測や瑠璃光如來妙不可思

讃の光輝を放ち日月光佛共供ゑ前後左右を守護それゞ歌舞の菩薩も光輝を添へ御前眼近かく進み
みつゝ式臺あつて左ゑある褥へ移ゑたまひゝる帝王是を御覽ゞて「ゆかわ摩耶久しく音信あさ
折ゝら今日の對面嬉しいぞやゝ實わ情あるおん言辭ゑ摩耶ハ回答も只平伏し君を敬ふて坐したま
ひ身を謙だゑて坐れど其の樣氣高く美ハしさ四下眩惑ゆさ光景ゑ夥多の女中も惚々と暫し見
取れて居たりしが頓て褥の近くへ進み「姫君惱ませたまひしと聞て皆々お案じ申し只懷ゝう
侍ゑしゑ早癒らせたまひけん今日のお入の如何ぞのりか喜こゞしや嬉しやと君のまへをも憚
ゝらず手取り袖曳き持囃せバ輪曇彌ハ不興顔背けて何の言辭もあく差俯むいて居たりしが稍流
し目ゑ摩耶の姿を熟々と眺め遣ゑと思ハず涙を發露々々と落しアラ怖ろしの俺ゞ心や斯程優しき
妹を嫉ミし事の恥ゝさと心の裡ゑ詫たまふ其の色外へ顯ハれて君を初め人々も輪曇彌の摩耶
を思ふ泪の体を見るよりも此までとハ事變ゑ扨々優しき姉君ゝあと僉一同わ感じゝる是や如來
の佛力わて一時の懺悔ゑ憶劫の罪障此わ消滅して一傷淨土の結緣となる最も尊とき事おりゝる

瑞帝おん聲清しく「あれある藍毘尼苑の實樹ハ容易ゑハ折らせぬ箸去れども一入風情ある嬉
しき今日の會あれバ僉々の心ゑ愉ひしを一枝づゝ許そべし疾々手折りて翳ゑ挿し其の花ゑよそ
へて一曲を唱ひ杯を廻らし唆々めき舞へと君の仰せの其の御言辭の末「サテ今日摩耶夫人ハ花
の主人ゑて自の翳ゑゝれバ志のある方より一枝手折りて釵頭わ挿せ酒を勧めよと仰せあれバ僉
々願ふところゝと齊一く庭前わ下立ちて何れゞ摩耶のおん方の御心附の花おふんと彼方此方
を打ち眺め思ひ〳〵ゑ見立てつゝ是や〳〵と手折りてハ僉釵頭ゑ挿しし込みつ摩耶の前に進み出
て杯に取添へて進めゝり佛に一枝の花を捧げ菩提の果實を得ると云ふこと此の時よりぞ初まゑ
ゝる左れバ杯の數廻ゑ帝王の御氣色美ハしく摩耶の方ゑ向ひたまひ「彼れある提婆羅樹の花花
ハ藍毘尼苑の長あれバ一枝朕ゞ翳にせんアレ折てよと仰せあゑ摩耶ハ嬉しく庭へ下り提婆羅樹
の下へ寄ゑてやをら左の手を延し一枝折らんとそる程に不思議や俄ゝわ差込來ゑて胎内殊の外
に動ゝゝれバ驚破靈夢の告諭ハ今あるゝ折も折とて花の下玉躰の緣も此までかと引入るやうに

見へ〻ぎゞ女中們い驚き慌忙ておん手と把ゞて勦り擦ゞ口を揃へて區々に御心を勵まし〻給れゞ摩耶い漸々人を力に提婆羅樹の下に坐し暫らく心を落ち着けたまふ是や正しく御安產の時至れりとぞ見へにける

釋迦八相倭文庫初編下之卷終

明治十六年八月十日出版御届　一冊定價金十五錢　郵稅四錢
明治十六年八月　出版　十冊前金一圓廿錢

出版所　京橋區瀧山町五番地　斯文堂
發兌　仝　四番地　報告社
取次　神田區神田雉子町　巖々堂
仝　羣馬縣前橋　報告社支店
仝　各府縣　書肆

○斯文堂發兌書目

一校訂繪本興田三代實記　全四十冊毎月二回又ハ三回出版　一冊定價十五錢郵稅四錢十冊前金壹圓
一與重書訂釋迦八相倭文庫　全凡三十冊毎月二回又ハ三回出版
一松染情史秋七艸　全四冊毎月二回出版　一冊正價十錢郵稅四錢四冊前金卅五錢
○繪本太閤記　○繪本曾我物語
○繪本甲越軍記　○開卷驚奇俠客傳
○俊寛島物語　○朝夷奈巡島記
○近世美少年錄　○皿々鄉談
○常夏双紙　○美農古衣八丈奇談
○繪本漢楚軍談　○繪本通俗三國志
以上近刻

報告社同盟出版ノ部
○甲部同盟出版書目
一資治通鑑　全六十冊　定價廿五圓豫約廿圓　十二回出版七回既刷

一漢書評林全凡廿八冊　定價十圓　豫約七圓五十錢　十四回出版　五回既刷

一佩文韻府　全百六冊　定價八十圓　豫約四十五圓　廿一回出版　二回既刷

一史記評林　全廿五冊　定價十圓　豫價上七圓　六回出版　並六圓五十錢　一回既刷

一十子全書全三十二冊　定價十二圓　豫約七圓八十錢　七回出版　近刻

○本部同盟出版書目

一沿革備考官令類聚目錄　全二冊　定價四圓　二回出版　豫約二圓八十錢　近刻

一佛國法理論　全一冊　定價一圓　郵稅二十錢　豫約並五十五錢　上七十錢　二十四錢

一全刑法詳說　全一冊　定價一圓廿五錢　郵稅卅二錢　豫約並八十錢　上一圓　四十錢

一全民法解釋　全一冊　定價二圓　郵稅五十八錢　豫約並一圓廿錢　上一圓五十錢

一全訴訟法原論全一冊　定價二圓五十錢　郵稅不定　豫約並一圓五十錢　上一圓八十錢

一全政典　全一冊　定價一圓　豫約並五十五錢　上七十錢

一社會學全書　全五十冊　一冊定價三十錢毎月二回又八三回出版　豫約一冊二十錢郵稅四錢

一名經世原理

一政理汎論　全十二冊　一冊定價二十錢毎月二回又八三回出版　豫約一冊十五錢郵稅四錢

一全世界一大奇書全卅五冊　一冊定價廿錢郵稅四錢　豫約一冊十五錢二回既刷

○乙部同盟出版書目　印刷着手ノ部

一本朝文粹正編全七冊定價三圓　續編全四冊定價三圓　豫約二圓　二回出版　豫約二圓　一回出版

一太平記　全十冊　定價三圓　豫約二圓　三回出版　一回既刷

一源平盛衰記　全十五冊　定價三圓五十錢　豫約二圓三十錢　四回出版　一回近刻

○同盟出版見本幷方法書御入用ノ向ハ二錢ノ郵便稅御送附次第呈送ス〳〵シ

大坂府平民
重訂人　渡邊義方
芝區日蔭町一丁目一番地
報告社主
出版人　大野堯運
京橋區瀧山町四番地